まちづくりひろしま

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第５１号（令和３年１月１５日）
読者数：６５５名（募集中）
ﾒｰﾙ: hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
HP:https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

謹賀新年　ウイズ・コロナで乗り越えていこう！

○巻頭言
　＃カミハチキテル

○時代を語り建築を語る会
　ガウディハウス

○ひろしまのまちづくりの動き
　旧市民球場跡地イメージパース

○Hihukusyo ラジオ
https://hihukushoradio.jimdofree.com/

目　次

○巻頭言：今後の平和、今後の国際平和都市とはどうあるべきなのだろうか
……広島修道大学准教授　木原一郎
○ひろしまのまちづくりの動き
・旧市民球場跡地、パーク PFI 導入
・旧陸軍被服支廠のその後
○広島の復興の軌跡・人物編：田原総一朗……編集委員　石丸紀興
○ほっとコーナー：美酒美肴で be スマイル……飲食店ホール　宮本亜由美
○時代を語り建築を語る会報告：語り人 豊田雅子（尾道空き家再生ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ代表）
○Hihukusyo ラジオ報告：ゲスト 石丸紀興（広島諸事・地域再生研究所代表）
○ＨＡＣＫ便り：ＨＡＣＫの今後の活動について…… ＨＡＣＫ代表　桧山　渉
○本の紹介：ひろしま地歴ウォーク２
○編集後記：あるべき姿を再構築するとき…… 編集委員　前岡智之

□ 巻頭言

今後の平和、今後の国際平和都市とは どうあるべきなのだろうか

広島修道大学准教授　木原一郎

建築学生であった私は卒業設計に向けてその頃そのようなことを考えていた。また大学院の頃は指導教官の影響でEcopeaceというコンセプトを掲げていた時期もあった。そして現在、その頃と同じようにまた広島の未来像を考えている。

2020年３月に「＃カミハチキテル - Urban Transit bay -」という公共空間活用社会実験を行った。実験地が相生通りの東急ハンズ前付近であったため、紙屋町と八丁堀の読みの頭を取ってカミハチと呼ぶことにした。

これまで長らくライバル関係にあった紙屋町と八丁堀であるが、近年では今後の都心空間はどうあるべきかを考える勉強会を共同で開催されていた。その一環で2017年には都市・地域デザインカンファレンス中国、2018年には全国エリアマネジメントシンポジウムを広島で開催し、名古屋や福岡などエリアマネジメントの先進事例を視察に行かれていた。

また時を同じくして、2018年には広島中心部が広島駅周辺に続き、都市再生緊急整備地域に指定された。今後の都市再生に対応するためには、都心部のビジョンの検討が必要ではないかと有識者からアドバイスをいただき、2019年３月から紙屋町・八丁堀エリアマネジメント実践勉強会を立ち上げ、紙屋町・八丁堀がさらに一体となって、都心部のビジョンについて検討を始めた。

その過程で中心となった考えが、これまでの車中心の空間から人中心の空間へシフトしていく事であった。夏までに一度途中経過をまとめた時に、このビジョンの検証のために社会実験を行うことを決めた。

実行委員会を立ち上げ準備をし、公道の一部やコインパーキングを人々が滞留することのできる空間に変えた公共空間活用社会実験「＃カミハチキテル - Urban Transit bay -」を実施した。

実施期間中はみるみる社会情勢が悪化し、ついには外出自粛要請まで出てしまったため、実験により得たデータは概ね良好であり、いただいた感想もほとんどが良いものであったものの、対外的には何を言っても特殊な状況であったことが付いて回るようになってしまった。

＃カミハチキテル
東急ハンズ前のコンテナとロングベンチ

この社会実験は何を残せるのだろうかと悩んだ時期もあったが、その悩みもよそに関係者の皆さんはこの社会実験から人中心の空間にシフトしていく効果や価値、そして皆さんがこれまで考えてきたビジョンに関して実感を持って理解してくださり、都心再生に向けさらにビジョンをブラッシュアップしていくことを決意されていた。

最も大きな成果はこの社会実験に関わってくださった皆さんの中にあったようだ。その後、実践勉強会をベースとして立ち上げた団体が官民連携まちなか再生推進事業に採択され、「エリアプラットフォームの構築」や「未来ビジョン等の策定」に向けた多様な方々との協働を通して、現在私はまた広島の未来像を考えている。

＃カミハチキテル
隣の駐車場を広場に
＊写真は石丸良道氏提供

「平和」は「戦争」の対義語であることは間違いない。また今後もそれが変わることはない。しかし都市やまちづくりにおける「平和」の対義語は何になるのであろうか。

コロナ禍の社会情勢を戦時中に例える報道や論説を目にしたことがある。経済を止めるな、感染防止が優先、いろいろな立場からの意見がある。そのいずれであっても解決策を講じて成果が出た場合、まちや地域は「平和」を手に入れることができるのだろう。

コロナ対策で屋外の憩いの空間を作り、そこで美味しいものを親しい人と食べる。これもや

はり「平和」を感じるのではないだろうか。
　おそらく新しい「平和」を手に入れるための正解はない。そのため、広島は新しい「平和」を生み出すための実験都市となるべきではないかと考える。小さな実験(アクション)でも良いと思う。その実験を通して、効果的な方針が見つかったときに、小さな新しい「平和」が生まれる。その小さな「平和」が集合し、ビックビジョンまたは国際平和都市を形成していくのではないかと思う。

　学生時代に広島は実験都市になるべきだとおっしゃっていたパネリストの方が登壇された講演会に参加した記憶がある。しかし残念ながらその講演会のタイトルや登壇者の方のお名前を失念してしまっている上に、どういう都市を実験都市と表現されていたのかすら覚えていない。おそらく他が霞んでしまうくらいの強い覚悟の入ったキーワードだったのだろう。
　今回の社会実験も覚悟を決めて臨んだ。しっかり覚悟を持った活動は後世に何かを残すに違いない。

ひろしまのまちづくりの動き

① 旧市民球場跡地、パーク PFI 導入！

・これまでの経緯

　2015 年の広島市長選の時、市は旧市民球場跡地整備イメージ図を公表し、サッカー場誘致を唱える対立候補者を圧倒して現市長が 2 期目当選。しかし 2 候補地の一つとして残る。
　2016 年にはサンフレッチェ広島の会長が球場跡地でなければ動かないと駄々をこね、振出しに戻る。
　2019 年にサッカー場は中央公園に決定し、球場跡地は 2015 年のイメージ案に沿って検討されることに落ち着く。

イメージパース

・整備手法としてパーク PFI 採用

　球場跡地は平和記念公園や水辺空間と一体となった緑豊かなオープンスペースを中心にイベント・集客ゾーンとして整備する。
　民間の資金やノウハウなどを最大限に活用するため 2017 年度の都市公園法の改正により創設されたパーク PFI 及び指定管理者制度を採用し、イベント広場等の設計・整備から整備後の管理・運営までを一者の民間事業者に委託する。

・今後の予定

　すでに事前説明会及び個別対話など民間事業者を募集できる環境を整え、今年 3 月末に事業者の公募を開始予定。その後、事業者の選定、設計・整備を経て、2022 年度中の供用開始を目指す。

② 旧陸軍被服支廠のその後！

・広島県の耐震再調査を踏まえた検討

　再調査の結果、1 棟の耐震化費用を前回調査の約 2 分の 1 に圧縮できることが判明。耐震性の有無と内部の活用案に応じた 4 パターンの概算工事費を出す。
　耐震改修して 1 階の一部を会議室として活用するケースは 13 億 2 千万円、1 階を博物館、2 階・3 階を会議室などに全面活用するケースは 17 億 7 千万円と算出。
　この結果を受けて県の有識者会議で方向性を定め、県議会などで議論し、最終的に県は国と広島市の 3 者で協議して決定する予定。

・市民団体の保存活用の動き

　「**Hihukusyo ラジオ**」は月 2 回のペースで被服支廠の歴史やゆかりのある人たちを紹介し、昨年末で第 13 回を配信済み。地道に被服支廠への関心を広げている。
　「**旧被服支廠の保全を願う会**」は写真展「旧被服支廠の記憶」を昨年 12 月に開催。コロナ禍のなか約 300 名が来場し、保存の機運を高める狙いは果たす。
　「**被服廠の話を聞き隊**」は地元住民を対象に「次世代に語り継ぐ―被服廠の昔と今」を昨年 11 月に開催。地元学校の先生にも参加を呼びかけ、まず先生に理解してもらい、生徒への波及効果を狙う。

○ 広島の復興の軌跡・人物編（第２３回）

～広島復興過程に対する基本的捉え方・考え方へ疑問を呈し、研究の方針を問い直そうとした田原総一朗氏～

ｳｲｷﾍﾟﾃﾞｨｱ参照

はじめに

田原総一朗氏と言えば著名な評論家であり、マスコミや月刊評論誌等に登場して活躍中である。もちろん田原氏に対しては様々な評価があり、また時代の流れもあって今も日本を代表する評論家とはいえないかも知れないが、政治家や官僚等に対してインタビュー等において鋭い質問を投げかけたり、独特の自説を披露したりするジャーナリスト・評論家という評価は定着していることであろう。実はこの田原氏が 1979 年、当時広島市千田町にあった広島大学工学部のわが研究室に突然訪ねてきて、いくつか質問を投げかけてきたのである。当時(今も同じ？)無名の一介の研究者を、なぜわざわざ訪ねてきたのか、今もって真相は不明であるが、ともかくとして殺風景な研究室で田原氏からの問いかけに対して懸命に答えたことを鮮明に思い出すのである。

よって今回は、復興研究そのものでなく、その研究過程で問いかけられた鋭い疑問を吟味しつつ、どう答えたか、果たしてどう答えるべきであったのか、大袈裟に言えばわが復興研究の存立に関わる問題に敢えて立ち向かって取り上げたのである。(以下本文は敬称略)

１．田原の広島での取材の主たるテーマは名古屋と広島の比較論

横道に逸れるかも知れないが、田原が取材し、まとめて報告したのは、月刊雑誌「潮」1980 年 1 月号であったことを確認しておきたい。その主題が「100 万人が”激る（「いかる」と読むらしい）”街／二都物語名古屋 V.S 広島」として名古屋と広島を対比しつつ類似と相違を説いていくという読み物であった。確かに経済圏文化圏ともに中間都市であり、中日ドラゴンズと広島東洋カープという地域球団を支え、トヨタと東洋工業という自動車産業を基盤とし、どちらにも百メートル道路をシンボル的に保持活用しており、当時は片やオリンピック開催都市として立候補し(落選したが)、片やアジア大会招致都市として準備をしているなど、類似点が多く、しかしいくつかの大きな違いがありそうだという、問題設定であった。

ちなみに名古屋を総括するサブタイトルが「”顔づくりに”に励む尾張人」であり、広島を総括するサブタイトルが「地域主義の”鯉のぼり”を掲げて」というものであった。広島は自らを”地方”であると割切り、中央に対して思い切った要求もし、利用もする、と捉え、「地方とは何か」を問いかけることが広島解明の鍵と考えていたようである。全体は 34 頁にわたるレポートであり、今回は名古屋についてはこれ以上言及しないので、もし、田原の言説を知りたい人は原典を参照して欲しい。

私に対しては、百メートル道路を含む広島の復興計画の考え方や事業の実態等を問おうとしたのであろう。恐らく、広島の経済界のリーダーにインタビューしている間に、私がその当時始めたばかりの復興研究のことを耳に挟み、興味を持ったのであろう。「彼は、広島の戦後復興計画について関係者たちの証言を収集している学者なのである」と紹介された。予約無しの突然の訪問であった。

２．復興計画の意味の問答

田原の質問は広島の復興計画がうまくいった原因についてであった。それに対して私は次のように答えたことになっている。少し原文のまま引用しておこう。

「原爆が落ちたために都市計画がうまくいった？私の立場からは、その問いに関しては何とも答えられません」石丸紀興は、そう断ってから、「しかし、都市の中心部に三万坪もの、大きな公園をつくる、なんてことは、原爆という事態でなければ、とてもできなかったことは確かでしょうね」とひとりごとのようにいった。現在平和公園になっているところは、以前は、材木町と呼ばれていた盛り場で、バーや飲み屋などが密集していたのだという。

「都市計画、具体的には、戦災都市の復興計画ですね。内務省の国土局の官僚たちが、それに着手するのは、戦後ではなく、戦時中です。20 年(昭和)の夏には、大都市だったら幅が五〇㍍以上の道路を、都市の骨格にすること。地方都市だったら、四〇㍍。そして公園は計画地域の市街地面積の一〇㌫以上は取る。広島の一〇〇㍍道路についても、二〇年には、もう基本方針ができ上がっているのですよ。」石丸紀興はいった。

「戦争が激しくなってから、というもの、都市計画の官僚たちは、全くやることがなかった。失業状態だったのですよ」石丸紀興はいった。

―日本の官僚はすごい、ということですかね。

「すごい、のでしょうね。彼等が何を考え、どんなつもりで、戦争末期に大胆な都市計画を構想したのか。都市計画学の上からも、人間としてもすごく興味があるので、調査しようと思っているのですよ」

と、私は答えたことになっている。さすが田原の突っ込みは厳しく、現在だったらかなり異なる答をするであろうが、当時このような考え方で研究していたことになる。

３．まとめとして

どう答えるべきであったか。やはり、広島の復興がうまくいったのか、うまくいったとすればその理由はなにか、とりわけ原爆被害と広島復興の関連をどう考えるのか、ということに集約されるであろう。もちろん、原爆投下のお陰で広島復興が成功したと言うことでは決してないが、復興計画の結果を賞賛すればいかにもそのように聞こえてしまうのであろう。実を言えば広島の復興計画も問題点を多く抱えており、成し遂げる過程で市民の犠牲やとりわけ被爆者や一部の外国人に苛酷な扱いをしたことが明らかになっている。

とはいえ、広島の復興が失敗したり、うまくいかなかったりした方が良かったのであろうか。復興しない方が良かったのであろうか。そうではないであろう。

被爆と復興は好機と結果ということで捉えるのではなく、原因・理由と回答・目標という関係ではないか。いずれにしても復興した広島が今後どのような都市活動を展開していくかということで、復興したことが良かったのかどうかが問われるのであり、そのことを自覚しない復興こそが最も問題ある復興であったということになるであろう。それにしても 40 年以上前にこのようなやり取りをしたことは感無量である。

田原総一朗の取材記事から始めて、まだ答え切れていない問題にまで触れてみたので、乞うご批判を。

（編集委員　石丸紀興）

［田原総一朗の略歴］1934 年滋賀県生まれ、早稲田大学第一文学部卒、テレビのディレクター、映画監督、フリーのディレクターなどの多彩な顔を持つジャーナリスト、評論家である。余計な説明は不要であろう。

□ ほっとコーナー

美酒美肴で be スマイル

飲食店ホール　宮本亜由美

仕事柄、お酒に関わることが多いので、今回はお酒を、その中でも「日本酒」をテーマに選びました。
私自身、元々日本酒が苦手でした。学生時代の失敗のせいです。
しかし、日本酒について学び、色んな銘柄を飲むうちに、すっかり魅了されていきました。

蔵を訪ね、作り手さんの人柄と思いを知ると、お酒の味わいが増していく。
海外留学で日本の伝統を残さなければ!!と家業を継いだ方がいるかと思えば、来日して飲んだ日本酒に感動し、酒を醸し出した海外出身の方がいる。廃業した蔵を再開させ、町おこしをしながらどぶろくを醸している方もおられます。
米 × 水 × 作り手の想い＝日本酒。

何を食べながら飲むのか、どんな酒器で飲むのか、どの温度帯で飲むのか。
これらを考えながら日本酒を嗜むようになると、ますます日本酒の味わいが深まり、日本酒を飲む楽しさが増していきました。
お家ご飯が増えた今日この頃。
ビールやサワーも美味しいですが、
せっかくならば、日本のお酒を！
日本酒を飲んで広島を、日本を、元気にしちゃいましょう！

愉快な仲間と美味しい日本酒とお料理と。
笑う門には福来る。
『体内アルコール消毒』で笑って乗り切りましょう！！

【お家でお手軽燗酒タイム】
耐熱容器にお湯をはり、そこに入る耐熱グラスに日本酒を注いでお湯につければ、即席燗つけ機。目玉の親父よろしく、燗酒とおでんでほっこりタイムはどうですか？？

○「時代を語り建築を語る会（第２９回)」報告

語り人：豊田雅子氏（尾道空き家再生ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ代表）

～ガウディハウスは何を語るか～

―尾道の空き家対策と地域再生の試み―

略歴：尾道生まれ、高卒後、関西外国語大学英米語学科卒業。JTB 専属ツアーコンダクター、海外渡航歴は 100 回以上。帰郷して「尾道空き家再生プロジェクト」代表理事。

尾道における空き家再生の取り組みについて、自分の体験に基づく中身の濃い充実した話で大変興味深かった。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2020 年 9 月 26 日（土）15:30～17:45

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ

☆ **空き家再生に取り組むきっかけ**

・1974 年、尾道生まれ・育ちで、大学を大阪で過ごす。西欧の古い街並みの景色が好きで、学生時代からバックパッカーとして、卒業しても大阪の旅行会社の添乗員として海外の街を見て回る。

・坂の多い尾道は車も侵入できず、トイレも汲み取りで井戸水を使用する生活の不便なまちではあるが、古くから栄えた港町で文化財級な建物も多く、風光明媚で静かな環境がある。それを負の遺産とみるか街の魅力とみるか。

・海外の街を見ても、尾道のような海と山に面した斜面市街地のまちが好きで、いつか故郷に帰りたいと思うようになる。暇を見つけては帰省し、自分の家を探すため空き家情報を集める。当時中心市街地に 500 軒ほどの空き家があったが、不動産屋では商売物件の対象とされておらず、市の空き家バンクでも情報不足のため自分の足で確かめるしかない。その間、地主の住職や地域の知り合いが増え、同世代の移住した人たちとのつながりが生まれる。

☆ **空き家再生プロジェクトの歩み**

ガウディハウス

・6 年ぐらい空き家探しをして、通称ガウディハウスと出会う。昭和 8 年築の建坪 10 坪、木造 2 階地下 1 階の別荘で空き家になって 25 年経過。装飾と曲線が多く、大工の遊び心溢れる和洋折衷住宅に魅了され、2007 年にセカンドハウスとして利用するため購入。

・その頃からブログ「尾道の空き家、再生します」を開設し、毎日更新していると空き家に関する問い合わせなど反響が大きい。そこで 2007 年 7 月に市民団体「尾道空き家再生プロジェクト」を立ち上げ、翌年に NPO 法人化し、コミュニティの再構築を目指す。

・古さや不便さを街の魅力として生かしながら手を加え、使いながら次の世代につなげていく尾道の街づくりスタイルを定着させていきたい。

・職人に学ぶワークショップや講師と回る街歩きなどの尾道建築塾、空き家に関わる人たちを呼んで空き家談議、空き家を使ったチャリティーイベント、空き家に残る家財道具をさばく蚤の市など、毎月実施し、仲間の輪が広がっていく。

☆ **主要なプロジェクトなど**

NPO が手掛けた再生案件は 18 件、2009 年から市と連携した空き家バンクでマッチングした案件は 123 件。定期的に空き家相談会や空き家巡りツアーなどを実施し、サポートメニューを用意して移住者のお手伝いをする。

・**空き地再生ピクニック**：車が侵入できない斜面地は、建築基準法により家を壊した後に新築できないので、空き地が増えていく。そこを NPO が借りて、みんなで手作りの公園とし、子供たちの遊び場や地域の交流の場とする。

・**土嚢の会**：居酒屋などを経営している会社の社会貢献として、若手社員が再生プロジェクトに関わる荷物の運搬などを手伝ってくれるボランティア集団を結成。

・**尾道建築塾・空き家再生合宿など**：素人でもできそうな内装工事などは、職人に学びながらのワークショップを企画し、一般の人を募ったり、夏休みには学生たちの合宿形式で実施。参加した学生が後に大学の先生になって学生を連れてきたり、尾道に移住してくる人もいる。

・**ガウディハウス**：再生着手第 1 号。残った家財道具などを整理し、蚤の市を実施。登録文化財に指定されたので内装は職人に依頼。改修途中、空き家をアート系団体の展覧会場とし

て貸し出す。コーヒーカップやスリッパなどの備品を地元のデザイナーに制作依頼。2020 年 2 月にようやく概成してお披露目会を開く。今後、この建築や空き家再生に関心のある人などを対象にした宿泊施設にする予定。

・**北村洋品店**：再生着手第 2 号は戦後の建物。痛みがひどいので、まず業者に構造や屋根とライフラインの補修をしてもらう。内装工事は 10 回ぐらいワークショップを実施。現在は親子連れのサロン兼 NPO の事務所として使用。

・**三軒家アパートメント**：風呂無し、共同トイレの昭和の古い 2 棟、10 部屋のアパート。簡単な改修をしてアーチスト達のアトリエや事務所兼ギャラリーとして募集。

☆　**新たな課題に取り組んだプロジェクトなど**

市街地を中心に取り組んでいたが、向島の島しょ部や御調町の山間部も廃校や元病院などの空き家再生の動きが広がっていく。御調町には社団法人の空き家バンクができて連携。

小規模の空き家はマッチングしやすいが、元旅館やアパート、病院などの大型物件は手つかずで残っていた。一方、商店街にも空き店舗が増えて賑わいがなくなり、若者の魅力ある働き場所も少なく、観光旅行者の 1 割も尾道に宿泊しないという課題があり。

そこで、大型の空き家を再生させて宿泊できる環境を作り、若い人の働き場を増やして賑わいを戻すことに取り組む。

・**あなごのねどこ**：商店街の一等地に残る明治時代からの呉服屋（町家）、奥行 40mの空き家を 2012 年に再生し、1 泊 2.800 円のゲストハウス（簡易宿泊所）として事業化。働き手として 20 人が従事。廃校の廃材を利用し、下駄箱や本棚やベッドなどの家具を自分たちで製作。カフェもあり、裏庭まで自由に行けるプラン。商店街の中に安価な宿泊拠点ができたので、新規な宿泊者層が増え、素泊まりなので周囲の飲食店や銭湯などにも金が落ちる。

あなごのねどこ

・**みはらし亭**：千光寺の真下の参道沿いにある見晴らしの良い大正時代の別荘「茶園」（登録文化財）を 2016 年にゲストハウスとカフェに再生。従業員 7 人。ネット上で支援金 500 万円を集め、市からも初めて 600 万円の助成を受ける。上からも下からも石段でアクセスするしかない場所なので、500 名を超える支援やボランティアの協力を得て共有財産として再生。

みはらし亭

・**元旅館の離れの大宴会場（６０畳）**：格子天井を広告にして 1 口 5 万円の寄付を募る。絵は尾道大学の日本画の学生に依頼。主にパーティやイベント会場として貸し出し。

☆　**質疑応答**

・斜面地で車を持ちたい人はどうする？バリアフリー対策は？⇒最寄りの駐車場に車を置いて、そこまでは自転車や徒歩。車が使えないことを前提に来ているので、バイクにしたり、必要な場合はレンタカーやカーシェアリングを利用。バリアフリーに対するニーズは少ない。

・地域住民と移住者の関係は？⇒昔からの港町なので、外来者に対しては開放的気質。若い世代の移住者が多く地域に馴染んでいる。I ターンの人と U ターンの人の仲が良く、I ターンの若い人と地元高齢者の間を U ターンの人がうまく取り持っている。ＮＰＯの会員は 200 名程いるが、その半数は移住者や小さな店を開いて空き家を活用している人達やアーチスト達であり、お互いに助け合う共同体のような感じである。

・移住者も子供が 18 歳になると転出し、戻ってくるには働き場所が必要だが？⇒子供が外に出るのは仕方ないとして、将来戻って来たいと思える街にしたい。

・学生など若者の協力を得ているが、大学とのつながりは？⇒尾道の空き家再生に関心を持った大学の先生がヒアリングに来られたり、私が大学に招かれたりする。そのご縁で先生から参加の声掛けをしてもらったり、合宿参加の募集などは近場のまちづくり系や建築系の大学にチラシを送り掲示してもらっている。

・空き家の再生で土地・建物の権利関係のトラブル等はないか？⇒所有者が不明という事例は少ない。斜面地の土地は 7 割くらいがお寺の所有。敷地境界線が不明なことはあるが、再生は建替えではなく改修工事なのでもめることはない。登記が義務付けられる前に建てられた建物や名義が変更されていないケースもあるが、入居の弊害にはならない。

（編集委員　瀧口信二）

○「Hihukusyo ラジオ（第１２回）2020.12.15（＊リンク参照）」報告

昨年の６月より月２回、１時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「Hihukusyo ラジオ（＊リンク参照）」がインターネット配信されている。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場しているが、今号では第 12 回目の石丸紀興氏の発言の要点を紹介。

ナビゲーター：土屋時子
ゲスト：石丸紀興（広島諸事・地域再生研究所代表）
インタビュアー：瀬戸麻由

―生い立ち、学生時代、広島大学建築学科助手時代の話など―

（省略）

―保存運動の成功体験―

世界平和記念聖堂の敷地に結婚式場付きホテルと信者会館を建てる計画が民間企業より提案され、聖堂側も乗り気であった。世界からの浄財で建てられた聖堂の建立趣旨から営利に加担することは聖堂の品位を貶めることになるという理由で反対運動を起こし、1989 年に約 4000 名の署名を集めて司教に提出。その計画は退けられた。

―被爆建物との関わり―

広島の戦後復興に関わった人たち 100 人以上に聞き取りして復興の物語を集め、100㍍道路や河岸緑地などの復興計画がどのように進められたのかをまとめた。1981 年頃その成果が評価され、広島新史の中に「都市文化編」として編さんされ、更に 1985 年にビジュアル化した「広島復興 40 年史」として結実。この中に主要な被爆建物の現状について触れている。

その後、助教授になった頃、学生の卒論テーマとして被爆建物を選定。被爆建物のリストを作り、被爆後の軌跡を追跡調査し、現状と課題について考察。自分の研究論文にもなる。

―被服支廠について―

まだ日本通運が倉庫として利用していた頃、東京から訪問した建築系の友人に被服支廠を案内すると、歴史的に貴重な建物をなぜ活用しないのかと批判された。戦前のレンガ建物は横浜、神戸、金沢でも歴史的建築物として有効に活用されている。

―1992 年の提言「赤れんが生き返れ」をまとめた経緯は―

当時、大阪にある紡績工場のレンガ建物がビアホールとして利用され話題となっていた。そこで被爆建物を前面に打ち出すのではなく、何か面白く利用できないものか建築の可能性について多分野の人が議論してまとめた提言。県も関心を持ち、委員会を設けて活用策について何度か検討。これまで瀬戸内海文化博物館とかロシアのエルミタージュ美術館分館などの構想が出たが、どれも立ち消えになる。その原因は真に建築の好きな人が関わっていなかったからではないか。

―いろいろな人のアイデアをまとめるにはどうしたらよいか―

行政が我田引水で一方的に方針を決めるのではなく、ワークショップ形式でみんなが提案を出し合って議論し、一定の方向に導いていく。その仕切り役を行政は果たしてほしい。

―保存活用を前に進めるためには何が必要か―

古い建物を保存改修するためには一般的には建築基準法に適合させなければならないが、国宝や重要文化財、歴史的建築物などの場合は建築基準法第 3 条により適用が除外される。

県が本気で保存活用する気なら、市は歴史的建築物に指定し、それを審査するための条例を制定するなど早めに準備しておかなければいけない。

歴史的建築物を保存活用するための一方策として容積移転制度がある。東京駅の保存はこの制度を適用し、敷地に建てられる余剰の容積を隣地に売却して改修費用に充てている。この制度を適用するためにも条例などの整備が必要である。

保存活用を具体化するには維持管理などの運営組織が必要となる。どんな組織を作って、それに市民団体などがどう関与できるかを検討。受け皿としてユニタールはどうだろう。

―保存活用の提案は―

広島・世界・過去・未来センター構想を描く。平和記念公園を中心に広大旧理学部 1 号館、旧日銀広島支店、旧宇品線沿いの被服支廠を含む旧陸軍施設群などをネットワーク化し、広島と世界及び過去と未来を結ぶ機能を持たせる。

そこで被爆 100 周年には世界から人が集まって、いろいろなイベントを年間を通して実施できるような場を提供する。

（編集委員　瀧口信二）

○ *HACK便り*

HACKの今後の活動について

ＨＡＣＫ代表　桧山　渉

今回のコロナ禍では、「自分たちが何をやっていきたいのか」、そのことを改めて考えるいい時間になったと思っています。

実際には、トライアルアンドエラーが続いていくと思いますが、これまでに固まってきたことを以下に整理しました。これを基本として活動を進めていきたいと考えています。

１．広島のHUBになるために～HUBとは人が集まり語り合うことで新しいコトを産み出す場所～

県内には多くのまちづくりに携わる団体があり、独自に活動を続けていますが、活動状況ばかりか、存在すら知らない場合も多々あります。

これは協力体制や連携に至る以前の段階であり、ともに課題や問題に取り組むためには、まずは**「知り合い、語り合う」**こと、そして**そのための気軽な場**が必要だと考えます。

ＨＡＣＫは、その場を創り出す活動をしていきます。

２．インターネットで知り合う・伝わる～ホームページ・SNS・動画の活用～

スマートフォンの普及率は、20代・30代で97%、40代で92%、50代で87%と、まちづくりに特に興味を持って欲しい世代に高くなっています。

手軽にわかりやすく情報収集してもらい、知り合える手段として、インターネットを利用することで、当団体のコンセプトに見合ったコンテンツを発信し、今後の対面式のイベントなどでの集客につなげます。

・まちづくりに関する情報を手軽に・わかりやすく
・行政の都市計画を知る手段として
・まちづくりへの想いを共有する入り口として

３．まちの今とこれからを視覚的に

ＨＡＣＫでは、まちづくりに関連する行政が作成した計画などを「インフォグラフィック」化し、HPやSNSなどで発信し、より多くの人達に広島県の今とこれからをわかりやすく伝える手助けをします。

インフォグラフィックとはデータや情報などを、わかりやすく視覚的に表現することです。視覚的に表現されたものなので、実際のイメージもつきやすい表現方法になります。

4. ホームページは信用されるための「ライブラリ」～ホームページが信用を築く時代～

きちんとしたHPを作成・管理をしていきます。

スマートフォンが普及した現在、まずネットで検索、というのは一般の常識となりつつあります。検索しても出てこない、HPも存在しない、では情報拡散で不利になるばかりか、信用に関わってしまうこともあります。

また、HPは情報を蓄積するので、いつでも誰でも見ることができる「ライブラリ」的な側面もあります。

＊制作中のHP: http://hiroshima-hack.org/

5. 動画で伝える広島～ＨＡＣＫチャンネルの開設～

日本だけでも月間利用者数6200万人はくだらないYouTube。無料で利用でき、非常に拡散能力のある媒体です。

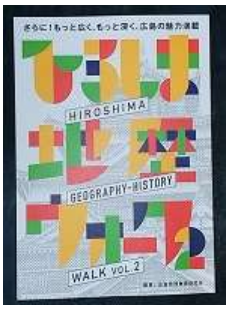
ＨＡＣＫチャンネルでは、広島のまちづくりに関する専門家などをお招きしてインタビューを制作・公開していきます。様々なまちづくりに関するトピックについて、歴史的、専門的視点から対話形式で学んでいきます。さらに、行政の動向についても専門家や、実務に関わる人たちを招いてインタビューを行い、多角的に、そしてわかりやすく、「普通の市民」目線で広島を対話から浮かび上がらせます。

６．オンラインの先にあるリアル～会ってみよう、行ってみようへ～

HP、SNSやYouTubeを見てＨＡＣＫのことを知り、インフォグラフィックやインタビューに興味を持ってくれた視聴者は、実際のイベントを行えるようになったとき、今度は実際に目で見て、聞いてみようという主体的な興味が産まれます。「イベントの主催が何をしている団体で、何を目的としているか何も知らない」という状態よりも、「ああ、あの○○をずっとやっている団体がリ

アルでイベントをやるんだね」のほうが安心感があり、参加の敷居はずっと低くなります。
オンラインで始まった『**知っている**』が、
『**足を運んで、目で見て耳で聞いてみよう**』へ、
そして『**話してみよう、語り合おう**』へとつながります。

○ *本「ひろしま地歴ウォーク２」の紹介*



2018 年に発行したガイドブック「ひろしま地歴ウォーク（＊リンク参照)」の続編「ひろしま地歴ウォーク 2」が出版された。

前巻は旧市街地が中心であったが、続編は郊外までエリアを広げ、新たに「広島の鉄道を歩く」の章を立てている。

西国街道から雲石街道、山陽本線沿いの広島駅と横川と己斐、旧宇品線と JR 可部線や市内電車など身近なところに見どころが沢山あり、知ればそこを訪れてみたくなる。

歴史的にも古墳時代までさかのぼり市内各地の名所旧跡などが幅広く紹介されている。

一度この本を手に取ってひろしまの街を歩いてみるのも一興であろう。

注）定価：1091 円＋税、発行人：空の下おもてなし工房、発行：2020 年 10 月 30 日

□ 編集後記

あるべき姿を再構築するとき

まちづくりひろしまは、発刊 50 号の節目を超え、新しい年を迎えました。コロナ禍にまだまだ緊張と自粛が続きますが、私たちは、これまでの目標設定と実現手法が必ずしも正しくなかったことに気が付かされ、新しい日常の大切さや脱炭素化社会に向けて大きく舵を切ることとなります。

こうした中にあって広島のまちづくりは、もう一度これまでを振り返り、構築してきた社会資産や新しく加えようとする事業のそれぞれを再考し、孫子の時代に向けてまちのあるべき姿を再構築するときにあります。

“まちづくりひろしま”は創刊時の理念を維持しつつ、時代の変化を正確に把握し、特に若い世代や女性層にも読んでいただけるようにお伝えして参ります。その中から新たな考え方や行動が生まれ、育ち、やがて広島の街が持つべき姿を取り戻すことを願ってーー

ご愛読いただきましてありがとうございます。

（編集委員　前岡智之）

＊メルマガを読まれての感想や質問及び広島のまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表